

ギフチョウ *Luehdorfia japonica* Leech

【選定理由】

本種は適当に人手が加わった里山の環境を生息地としている。すなわち、春には林床に光が差し、夏には日陰を作るような落葉樹が生え、落葉樹林の林縁近くに幼虫の食草が自生し、成虫の吸蜜植物が多いような環境である。これらの自然は近年消滅し、本種も多くの産地を失った。とくに関東地方や太平洋沿岸地方の産地の減少が著しい。

【形態】

前翅長約 32～34mm の小型のアゲハチョウ。細長い尾状突起をもつ。翅表は黒と淡黄色の縞模様。後翅外縁に橙色紋、その内側の黒帯の中に藍色の小斑点、肛角に赤色の斑紋をもつ。はやや大型、翅形が丸く、前胸背に褐色の毛をもつことから区別できる。

近似種のヒメギフチョウ（愛知県には産しない）はやや小型、前翅の最外縁の黄色の線の最上端が内側にずれ非連続となる。また、後翅の外縁に沿う橙色紋が地色と同じ淡黄色である。

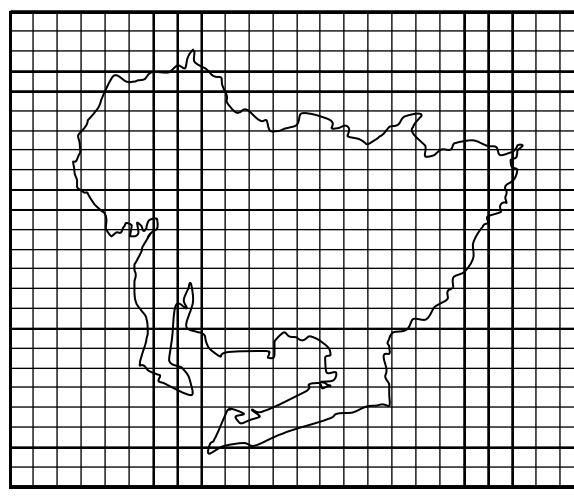
産地により微妙な翅形、大きさ、斑紋、尾状突起の長さなどに差がみられる。西部愛知県産は、岐阜県美濃地方産と同様やや小型で、黒帯の幅が広く、一見黒っぽい。愛知県東部産は、やや大型で黒帯が細く、明るい。

【分布の概要】

名古屋市、犬山市、小牧市、春日井市、日進市、瀬戸市、愛知郡長久手町など尾張東部丘陵から、豊田市にかけて産地が比較的多い。この群の東限は豊田市足助付近、南限は同市古瀬間町となる。一方、東部群は岡崎市から蒲郡市、豊橋市、新城市にかけてやや局地的に産する。旧北設楽郡には設楽町（田内、清崎）東栄町（本郷、奈根）にごく少数の採集記録がある。津具村と設楽町境の碁盤石山で 2 の採集記録があり、例外的な産地かと思われる。両群の間には矢作川が流れており、分布空白地帯となる（高橋, 1995）。

本州の特産種で、離島や小さい半島、沖積平野からは知られない。丘陵地帯から低山にかけて産地が多く、飛騨では山間の湿原が生息地となることもある。北限は秋田県の鳥海山麓、西限は山口県。日本海側では、ほぼ連続して分布し、個体数も少なくない。太平洋側では、東京都を東限とし、神奈川、静岡を経て愛知と分布するが、いくつかの産地群に分断されており、連続して産せず、また近年激減～消滅した産地が多い。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

主な生息地は、丘陵から低山にかけての人里で、春には林床に光が差し、幼虫の食草のカンアオイ類や成虫の吸蜜植物であるカタクリやスマレが咲く明るい林の周辺である。針葉樹の植林でも、まだ背丈の伸びず林床が明るい時には、幼虫の食草がよく生育し、ギフチョウの発生地となることがあるが、針葉樹が育ち、林床が暗くなったり、下草の背丈が伸びたり、ササやシダ類が繁茂するとカンアオイは消滅し、ギフチョウも産しなくなる。このように生息地の影響がギフチョウの発生に大きく作用するため、産地の変遷が激しい。

成虫は年 1 回、多くの産地ではソメイヨシノの開花と一致して羽化し、スマレ、カタクリ、サクラなどを訪花する習性が強い。カンアオイ類（愛知県ではヒメカンアオイが優位、愛知県西部では一部スズカカンアオイ）も丁度その頃新芽を出し、この葉裏に産卵する。幼虫はその葉が硬くならないうちに食べ、ほぼ 1 か月で蛹化、そのまま冬を越す。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

名古屋市内からはほぼ絶滅した（高橋, 1975）。豊橋市東部、蒲郡市北部からも絶滅した可能性が高い。一般に都市部周辺では多くの産地が消滅した。上記したように生息環境の変化を大きく受け、ギフチョウの発生量の多寡が左右され、ときに多くの個体を見る年があったり、急に減少したり、年による発生量の変化も小さくない。産地の消滅は、整地、ゴルフ場、工場、住宅地の建設によることが多い。また、人工の手が加わらず、放置された林も産地を消滅させた。

【保全上の留意点】

幼虫の食草、成虫の訪花植物、活動空間など、生息環境を保つことが最も大切である。人工の手が入り過ぎることも、自然を放置することも、本種の生存には適さない。

【特記事項】

本種を放蝶して増やそうとする試みがある。これには、その固有遺伝子を攪乱したり、飼育による摂食能力の劣る個体を自然界に返したりして、本来の自然をむしろ損なうことにもなりうる。綿密な計画を立て、慎重に行う必要がある。

【引用文献】

- 高橋 昭, 1975. 名古屋市のギフチョウは絶滅してしまったか?. 昆虫と自然, 10 (4): 29-31.
高橋 昭, 1995. 愛知県のギフチョウ. - 90 年間の記録から -. 昆虫と自然, 30 (4): 4-6.